

Title	史的研究と修史學
Sub Title	
Author	今宮, 新(Imamiya, Shin)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.2 (1929. 8) ,p.139(305)- 148(314)
JaLC DOI	
Abstract	此の一篇は、テガート氏(Frederick J. Tefgart)の史學研究序説(Prolegomena to History, reprinted from the University of California Publications in History, Vol. 4, No. 3.)の第三章Historical Investigation and Historiographyを翻譯したものである。本書は、かつて、故田中萃一郎博士より講義を受けたものであるから、此の翻譯も先生の講義に負ふ所が多い。
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19290800-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史的研究と修史學

此の一編は、テガート氏(Frederick J. Teggart)の史學研究序説(Prolegomena to History, reprinted from the University of California Publications in History, Vol. 4, No. 3.)の第三章 Historical Investigation and Historiography を翻譯したものである。本書は、かつて、故田中萃一郎博士より講義を受けたものであるから、此の翻譯も先生の講義に負ふ所が多い。

第一節

歴史と言ふ文字は、普通色々の意味に用ひられてゐる。例へば、或る一國の歴史と言ふ場合には過去の事件の記述、或は、過去の事件の過程其者を意味するものであつて、それは丁度、或る人の「一生」と言ふ場合に、其の人の全生涯の記述、

もしくは、彼の個人的經驗の連續其者を指すと同様である。而して、此の兩義の中、前者は、學者が通例重視する所であるが、その場合に於ては、歴史と言ふ文字は、ギリシヤ人が之に與へた如く、二様の意味を含み、研究と叙述とを合せ有してゐるものである。

ギルバート・マレー(Gilbert Murray)は、次の如く言つてゐる。「吾々は、好んで、第四世紀の術語を第六世紀に適用し、哲學と歴史を、區別せんとするのが常である。然しながら、哲學者ソロンが智識を求むる爲に、各地を旅行した時、彼は、歴史家ヘロドトス及びヘカテウスと同一の事業を爲したのである。……「Historie」は探究であり、「Philosophia」は智識愛である。此の兩者は、共に大部分は同一の範圍に互つてゐるのである。……「然し」「Historikos」は、多くは旅行家であり、講釋師である」(1)。

イオニヤ人の批判的精神は、ヘカテウス（Ἡρόδοτος）の言つた如く、ギリシヤ人の物語が多種多様であつて、信ずるにたりないことを知るに至り、こゝに於て、從來、疑ふべからざるものとして認められてゐた物語の修正を企つるやうになつたのである。此の史的研究は、新運動であつたけれども、叙述の方法を退けるには至らなかつた。蓋し史的研究は、修史の補助として認められたからである。上古のギリシヤ・ローマの時代を通じて、舊來の叙述は、その本來の價値を失はず、修辭學の發達に依て、歴史の研究に對し、不當の影響さへも及ぼすの傾向を生ずるに至つた。而して、修辭學は、當時教授せられたが、歴史の研究は、教授せられてゐなかつたのである。然るに、第十九世紀に於ては、形勢が全く一變し、學者は、言はば、歴史本來の語義に立ち歸つて、史的研究と史的叙述との間に、明確な區別を立て、史的研究を以て、科學であると主張し、史的叙述を以て、藝術となすに至つたのである。今日、學者間に於ては、「歴史」を以て、從來の叙事詩と異

つて、ヘカテウスの著作の特色とする研究の新要素と同視する者がある。斯くて、「人類社會の物語を、文學的に表現することが、（研究者を意味する）歴史家としての歴史家の仕事でないことは、丁度、星の話を、藝術的に表現することが、星學者の事業でないと同じである。」と言ふことは、確言し得らるのである⁽²⁾。實に史的研究と叙述との區別が、頗る明白となつて來たので、今や歴史と言ふ文字に對して、古典的な二種の意味を、再び與ふることの必要を感じざるやうになつたのである。「歴史は科學であるか、又は藝術であるか。」フアリス（Hirsch）は之に答へて、「世人は、歴史の研究方法及び目的に對する概念の相違に依て、正反對の答を之に與へるのである。」と言ひ、更に又語を續けて次の如く言つてゐる。「自分の見る所に依れば、眞理は此の兩極端の中間に存するものゝやうである。歴史は、そのいづれでもなくて、双方の性質を共に有するものである。歴史家には二通りの仕事がある。その一は、眞理の發見であり、他の一は、眞理の表現である」⁽³⁾。かくして、

二十世紀の折衷説に依て、ヘカテウスの地位は復活したのである。

フアースの意見には賛成者が少くない。今其の二三を擧ぐれば、アルベル・ソレル (Albert Sorel) は次のやうに言つてゐる。「歴史は、今や一の科學、社會の科學とならうとする傾きがある。歴史は又、古來から、一の藝術であつた、そして永久に又、一の藝術たることを失はないだらう。即ち人の情を辨別して、之を畫くの藝術たることを失はないだらう」(4)。

カミーユ・ジュリアン (Camille Julian) は「歴史は、一個の藝術であるが、しかし、先づ一個の科學たるを要件とする」(5)と言つてゐる。

ガブリエル・モノー (Gabriel Monod) の意見は、「史的研究及び編史は、一の科學を構成するものである。而して、此の科學は、歴史の藝術に材料を供給するものである。約言すれば、歴史的研究法及び批判、又は、其の研究の結果に、史學(歴史の科學)を構成するものが存するのである。總て著される所のもの、即ち叙述は歴史の藝術である」(6)と言ふのである。

「歴史が科學であるか、藝術であるかと言ふ問題は、久しく論争されたが、此の問題は實に無用な事である。歴史は科學であると同時に又藝術である。」歴史は、好奇心でもなく、無際限のデレツタンテイズムでもない。歴史は、嚴密なる科學であり、精妙なる藝術である。人智始つて以來、人類の習得した經

験の無限の彙纂である」(7)と或る人は言つてゐる。

トレヴェリヤン (G. M. Trevelyan) は次のやうに言つてゐる。「歴史は、藝術であるか、又は科學であるかと言ふ難問題に就いて、吾人は之を兩者であると言ふか、さもなければ、何れでもないと言ひ度い。蓋し歴史は雙方の要素を有するものである。その科學たるは、歴史上の「原因、結果」を推測することではなくて、史實に關して、證據となるやうな材料を蒐集し、之に考證を加ふるにあつて、その場合、多少の科學的精神が、歴史家にとつて必要であることは、恰も、これが、探偵又は政治家に必要であると同様である」(8)。

ホルデン子爵 (Viscount Haldane) は次のやうに言つてゐる。「故に予は、歴史は全く科學であるか、又は藝術であるか、認めなければならぬとする論者に同意することが出来ない。歴史は、之を表現する場合に用ひる詳細なる事實について、正確を期し、輕重を失はしめない爲に、普通科學的研究方法と稱せらるゝものを必要とする點に於て、一種の科學であると言ひ得る。然し、之を表現するにあつては、常に形體と生命とに、特に天分を有する藝術家の方法に依らなければならぬのである」(9)。

初期のギリシヤ人は、散文物語の作者を、散文史傳家 (logographer) となし、歴史家を研究家となした。然しながら、不幸にも、散文史傳家と言

ふ文字がすたれた爲めに、甚だしく思想の混亂を來すに至つた。この事は、「歴史」の起原に關して唱へられてゐる意見に於て、認められるのである。ベリー (Bury) は、「嚴格な意味に於ける歴史が書かれるより餘程以前に、初期のギリシヤ人は、彼等には歴史と同一に見られ、そして、何等の疑ふ所なく受容せられた文學、即ち叙事詩を有してゐた。」と言ふことを認めつゝも、彼は更に、ギリシヤ人は、歴史上の材料に、批判を加へた最初の人であつたからして、彼等に依て、歴史が創始さるゝに至つたのであるとの意見を有してゐる⁽¹⁰⁾。然るに、後世の學者に之を參照すれば、アクトン卿 (Lord Acton) は、次の如く言つてゐることを知る。「文藝復興の時代に至つて、始めて誤謬を摘發する技術が、鋭敏なイタリヤ人の注意にのぼるようになり、こゝに於て、我々の了解する意味の歴史が知られはじめ、我々がその研究方法に於ても、その材料の撰擇に於ても、今尙、模範とするに足る幾多の著名なる歴史家が輩出するに至つたのである」⁽¹¹⁾。かくして、近世史の研究

家も又、自分達の時代を以て、所謂歴史が始つたものと見なしてゐる。グーチ (Goeh) は次のやうに言つてゐるのである。「中世期に於て、非常に大なる文學上の價值を有すると共に、その當時の事件に對する證言も、十分信ずるに足るべき多數の歴史家が輩出するに至つた。即ちマツシエー・パリス (Mathew Paris) フエルツフェルトのランベルト (Lambert of Herfeld) ジョアンヴェユ (Joinville) 及びフロアザール (Froissart) 等である。然し、歴史的研究の眞の條件は、未だ存してゐなかつた。「何となれば、思想の自由、表現の自由、異なる時代に對する洞察力、公平なる判斷等は、史學の基礎を爲すべきものであるが、此等に對しては、世界は實に第十九世紀まで、即ち第二の文藝復興まで待たなければならなかつたからである」⁽¹²⁾。

ガブリエル・モノーは次のやうに言つてゐる。「吾人が、文學の一部門、又は一の科學として認める所の歴史は、吾人にとつて、は、文藝復興以後のものである。疑もなく、中世期の年代

記者者の中には、シヨアンヴァイユ、ヴァイラーニ (Villani) 及びフロアザールのやうな、非凡な著述家が居たのであるが、然し嚴密な意味に於て、歴史家と言ふことは出来ない。此等の作者は、過去よりも、寧ろ現在に重きを置き、當代の人に向つて、前代の正確な姿を再述するよりも、寧ろ自己の目撃した又は參加した事件の記憶を、後世に残すことを欲したのである⁽¹³⁾。

此等の例證は、勿論、なほ各書に散見してゐるが、今その二三を挙げれば、ラウンド (Round) は、フリーマン (Freeman) に就て次の如く言つてゐる。「しかも予は、取り敢ず附言する。即ち彼 (フリーマン) は、過去の學派に屬するものである。彼は近代の科學的精神を缺き、發見に對して、近代的の熱望を有してゐなかつた、——要するに、……彼は『不用となつた化石』である」⁽¹⁴⁾。

アルボア・デウ・ジュバンヴァイユ (Arbois du Jubainville) はフェステル・デウ・クーランジュ (Fustel du Coulanges) の缺點を暴露する爲に、一書を著し、次のやうに言つてゐる。フェステルの根本思想は誤つてゐる。「原始社會の唯一の基礎」をなすものは、宗教ではない、——戰爭である。「非軍國主義であるこの偏見にもとづき、帝政治下に於て、先驗的に書かれた史籍は、我國の禍であつた」⁽¹⁵⁾。

「輕蔑的優越感は、決して缺けてゐなかつた。」——實に奇怪なるこの評言は、現代の歴史家に加へられたものではなく、ヘルナドット・ペラン (Bernadotte Perrin) が、上古のギリシヤ・ロ

ーマの史家の、その先輩に對する獨特の態度を記述した言葉である⁽¹⁶⁾。

斯くの如くして、「歴史」は、批判的精神の覺醒さるゝと共に、一新さるゝに至つたのである。此の新史學「起源」の發見は、歴史を以て、批判的研究 (考證) と同視する學者に依て明になされたものである。之に反して、歴史は、本來叙述 (修史) と同一であるとする學者は、歴史の起源を、更に上古にあるとなし、叙事詩、民謠は勿論、珍奇なる事變、又は冒險の最も單純な説話にあると認めるのである。

第十九世紀の歴史家が、客觀性、眞實性と言ふ高尚な理想を標望して、歴史研究法の改革を企てたことは疑ない所である。學者は、捨てられた遺物中に、古い傳説の正確を證明すべき材料、例へば、ベネチヤの説話 (Venetian Relazioni) の如きが存し、又忘れられたる紀念物が、文化の物置及び芥捨場に、保存されてゐることを發見して、こゝに、考證改訂の事業に着手することゝ

なつたのである。而して、古い書翰文の再讀が、時日の経過と共に、忘却されてゐた當時の事情を甦らせ、又有名な事件に就て、今日まで有してゐた印象を訂正し得ると同じやうに、社會の記憶も又、記録の調査、遺跡の發掘、或は比較研究に基く習慣儀式の解釋に依て、再現され、復舊されるのである。考證の用に供することの出来る史料の發見された結果、學者は——ヘカテウスの如く、——過去の時代に關する、ヨーロッパ人民の記憶を記してゐる多數の著述の、信頼し得るや否やを疑ふに至つたのである。然しながら同時に、此の考證に依て生じた新しい結果は、依然として、在來の形式に於て叙述せられつゝあるのである。

ガストン・ボアシエー (Gaston Boissier) の言つてゐるやうに、歴史は、「その研究方法を完成したけれども、その性質を變化するには至らないのである」⁽¹⁷⁾。ギリシヤ人は、十分に意識して、叙述(修史)を以て、歴史家の目的となし、そして、その編述は、考證的批判を受くべきものなることを要求した⁽¹⁸⁾。要するに、今日の學者の仕事は、こ

の原則を變へてはゐない、只叙述(修史)を輕んじ、研究に重きを置く傾きがあるばかりである。實に、修史——事件を叙述的形體に表現すること——が總ての研究の目的であることは、疑のない所である⁽¹⁹⁾。例へば、ランケ (Ranke) を以て、近代歴史家の模範であると、一般世人の認むるのも又此の意味に外ならない。「事實有りのまゝ。」 (wie es eigentlich gewesen) ——と言ふ彼の格言は、最近半世紀間の論争に際して、其の眞價以上に重んぜらるゝに至つたが、その内容について見れば、文藝復興以來の同様なる意見と、さまでの相違がないのである⁽²⁰⁾。ランケは文筆の士であつた、そして、リヴェイウス (Livius) 又はデオ・カシウス (Dio Cassius) 達のやうな正確さを以て、ベネチヤの公文書の内容を、再修することに成功したのである。而してランケ自身は、歴史研究の根本問題について、吟味することを避けた⁽²¹⁾。蓋しランケは、その先輩と同じく、「歴史」を以て、利用し得る最上の證據と思はるゝ所のものを基礎としての叙述であるとしてゐる。——そしてベリイ教授さ

へ、その科學的研究の結果を、敘述的形式を用ひて發表してゐるのである。ラウンド氏は次のやうに言つてゐる。「予は、綜合的に記述された歴史と、根本的研究についての著述とを、混同しようとする者は居ないと思ふ、尙更、何人でも、前者を棄て、後者だけを認むべしとなす者もないのである。」而して、更に彼は言葉を續けて、我々の如く、考證的研究に従事する者は、一般的の需要に應ずる「『綜合的』歴史家のために、準備をなすに外ならないものである。」と言つてゐる⁽²²⁾。

歴史研究の問題について、論争するにあたり、これに參與する歴史家が、歴史と言ふ文字の諸種の意義に關して、様々の見解を取つてゐるがために、彼等の中の相互の理解を妨ぐる事が頗る大である。既に述べた如く、先づ第一に、歴史と言ふ文字は、「研究」を意味した。然し、上古のギリシャ・ローマの時代、文藝復興の時代、又は現在に於て、世人の一般に用ひる歴史と言ふ文字は、完成した文藝上の作物を意味し、考證的研究の結果は、要するに、之が補助に過ぎないのである。

現在の多數の歴史家が、研究と修史との關係を全く顧慮しないで、研究に従事し、且つ歴史家の事業を、この從屬的な地位に限定すると言ふ概念に對して到底満足しないのは、全く別な事柄である。此等の歴史家は、彼等の言ふ所に依れば、「歴史その者のために、」研究を意味する「歴史」に従事することを目的とするものであり、又彼等の事業が、科學的であると考へて満足してゐるのである。今日、歴史研究法の根本問題に關する種々の考究が、主として述べられてゐるのは、ルイ・アルフェン(Louis Halphen)の所謂「歴史の病弊」を意識し、或は意識しない此等學者の注意を、喚起する爲である。然し、特に此等の學者に對しては、「歴史」は明に、個人的特徴を有する一種の文學的形式、或は、文體の名稱であると言ふこと、及び、此等の特徴が觀察され叙述せられて後、はじめ、歴史的研究が、果して獨立の立場に於て行はれ得るや否やを、明白に論議し得ると言ふことを述べる必要がある。(未完)

註

- (1) History of Ancient Greek Literature (New York, 1897), p. 123. Alfred & Maurice Croiset, Histoire de la littérature grecque (Paris, 1890), II, 535; J. B. Bury, The Ancient Greek Historians (New York 1909), P. 16. 參照。
- 此の二種の著書は、Burke の用いた「前時代の歴史を涉獵する……」(to rake into the histories of former ages...) といふ語句の中心を語らざる。同くならば、此處に於ては、rake といふ語は、古来の著書、race 又は race (歴史) の近代化をなすのいふなるからいふなる。獨逸語の Geschichte といふ語は、歴史に親近した事象 (das Gesch-ehene) の意味を含むものといふ。本來は、客觀的の著書を有するものといふ。P. E. Geiger, Das Wort "Geschichte" und seine Zusammensetzungen (Freiburg, i. B., 1908.)
- (2) J. B. Bury, An Inaugural Lecture (Cambridge 1903), p. 17.
- (3) C. H. Firth, A Plea for the Historical Teaching of History (2d ed., Oxford, 1905), p. 8.
- (4) Nouveaux essais d'histoire et de critique (Paris, 1898) p. 11.
- (5) Extraits des historiens français du XIX^e siècle (6e éd., Paris, 1910), P. cxxviii.
- (6) De la méthode dans les sciences (261, Paris, 1910), pp. 371—372.
- (7) G. Deslevises du Dezert & L. Bréhier, Le travail historique (Paris, 1913), pp. 5, 17.
- (8) G. M. Trevelyan, Olio, a Musee; and other Essays (London, 1913), p. 30.
- (9) Viscount Haldane, the Meaning of Truth in History (London, 1914), p. 34.
- (10) J. B. Bury, The Ancient Greek Historians (New York, 1909), pp. 1—2.
- (11) Lord Acton, A Lecture on the Study of History (London, 1896), P. 11.
- (12) G. P. Gooch, History and Historians in the Nineteenth Century (London, 1913), pp. 1, 13.
- 「我々の今日用ゐるギンバの意味の歴史を記述する、ソビエト英國に於ては、第十世紀に始つた。」A. J. Grant, English Historians (London, 1906), P. XXIV.
- (13) Gabriel Monod, "Introduction," Revue Historique, I (1876), 5.
- (14) J. H. Round, "Historical Research," Nineteenth Century, 44 (1898), 1007.
- (15) Deux manières d'écrire l'histoire (Paris, 1896), p. 259.
- (16) 彼の著書 "The Ethnics and Anenitics of Greek Histo-

riography," *American Journal of philology*, 18. (1897), 255—274. 參照。

246.

- (17) Gaston Boissier, *Tacitus and other Roman Studies*, tr. by W. G. Hutchison (London, 1906), P. 82. J. F. Rhodes は「科學的歴史家は、歴史研究法を一變したのべ

- (19) 「過去の事實の敘述的描寫は歴史的作物の最も完全な形をなす。」O. & V. Morlet, *La science de l'histoire* (Paris, 1894), p. 60. 「要するに敘述は、歴史研究に於て重大なる地位を占むるものである。史料の探究は、附屬的作業に過ぎない。」G. Desfaves du Dezert & L. Bréhier, *Le travail historique* (Paris, 1913), p. 8.

はなく、之に多くを加つたのべである。」と言つてゐる。
Historical Essays (New York, 1909) P. 45.

「クロドトスの如くに、物語を述べることは、今日まで我々のなし來れる所のものべである。」Justin Winsor, "The Perils of Historical Narrative," *Atlantic Monthly*, 66 (1890), 293.

(20) 例へば Edmund Bolton の *Hyperitica* (1618?) から

「今日まで我々のなし來れる所のものべである。」Justin Winsor, "The Perils of Historical Narrative," *Atlantic Monthly*, 66 (1890), 293.

の次の如き拔萃と比較せよ。「自分が、今日まで讀んだ近代の著述家は、千五百年又は千六百年前の事件を記述するにあつて、彼等自らの嫉妬、情慾、愛情を、そのまゝに表してゐる。故に現代の歴史家は、自分の偏見を主とせしむるやうに誘惑するこの危険な魔女を避けなければならぬ。但し歴史家が、眞理及び正實の爲に盡さず、一黨一派の爲に盡力し、争鬭の爲に、あらゆる缺陷あるにも拘らずその黨派のものが彼を支持し得る間だけ、價値を有せんとするものは論外である。歴史家は、それ故に、全く偏見、不正、或は悪意を有することなく、單に事實を有りのまゝに (things as they are) 述べておかなければならぬ。」J. E. Spingarn, *Critical Essays of the Seventeenth Century* (Oxford, 1908), I, 93.

(18) 考證的批判の標準が時代と共に變化することは、言ふまでもないことである。他の一方に於て、近代の標準を以て、古代の考證を是非することは、歴史的思想の否定である。例へば Wilamowitz-Moellendorf の次の如き記述と比較せよ。「ポリビオスが彼自身の研究方法につき、又はエフオルス及びチマエウスの批判について述べた數言は、畢竟するに、ルキアヌスの修史論のやうに、陳腐なものである。」
Greek Historical Writing, tr. by Gilbert Murray (Oxford, 1908), p. 15.

(21) 「彼(フランク)は、形而上學的史論の迷路に踏み入ることを欲しなかつたからして、歴史の多くの根本問題に就ては、何等正確な研究をなさなかつたのべである。」Eduard

Mommsen は夙に、ポリビオスに就て次のやうに言つてゐる。「正義、名譽、宗教等に關係のある一切の問題に對する彼の論じ方は、只に淺薄なばかりではなく、著しく誤つてゐる。」
History of Rome, tr. by W. P. Dickson, IV, 222.

Eduard Mommsen は夙に、ポリビオスに就て次のやうに言つてゐる。「正義、名譽、宗教等に關係のある一切の問題に對する彼の論じ方は、只に淺薄なばかりではなく、著しく誤つてゐる。」
History of Rome, tr. by W. P. Dickson, IV, 222.

Fueter, Geschichte der Neuern Historiographie (München, 1911), P. 485.

- (22) J. H. Round, "Historical Research," *Nineteenth Century*, 44 (1898), 1005. 近代に於ける研究家の或者の態度を、Round氏は、同文に於て、頗る完全に述べてゐるやうである。「我々の要求する所は、ハリソン氏をして、我

々が、その困難な道を追究することを承認せしめ、且つ、我々の研究方法を嘲笑し、或は研究の結果を諷刺することを、慎ましむることである。」

今 宮 新